



同じ林相の晩秋の林は色彩もとぼしいが、クリタケを2本見つけたという福田さんの手元をのぞき込んだり、「これがウコギです」と長澤さんが手にした落ち葉の黄色に季節の終りを感じ取ることができた。下るほどに



左から、2人おいて、田村佐喜子、渡部温子、高辻謙輔、松本恒廣、福田光子（撮影：長澤洋）

天気は回復。長坂駅まで送ってもらう車中からの眺めは、八ヶ岳に雲が少しかかっているものの、茅ヶ岳の方はすっかり晴れあがっていた。



紐で括りつけられた道しるべ（撮影：渡部温子）

## 12月例会/忘年会「バルト三国、最高峰とトレッキングの旅」

横関 邦子

出席者： 梨羽時春、松本恒廣、吉田理一、里見清子、渡部温子、川嶋新太郎、鳥橋祥子、樋口公臣、大島洋子、島田稔、山川陽一、夏原寿一、瀬戸英隆、田井具世、川口章子、深田森太郎、小泉義彦、近藤雅幸、石塚嘉一、荒井正人、横関邦子、藤下美穂子、小原茂延（計23名）

2015年5月20日から10日間、日本山岳会の集会委員会が企画するバルト三国国立公園トレッキングに参加してきました。それまで、バルト三国は、名前も正しく言えない、地図上の場所や首都などちょっと詳しいこと聞かれたら、よくわからないと答えるしかない国々でした。訪問してきた今は、三国ともとても素晴らしく、緑がいっぱいで広々し、食べるものも美味しく、機会があったら、自然がそのまま残っている今のうちに、時期を選んでぜひ足を運んでくださいと話しています。



リトアニア、ラトビア、エストニアのバルト三国は、1990年代に当時のソ連から独立しています。ヨーロッパとロシアの間に

あり、ヨーロッパから攻められ、ロシアから攻められ、独立していた時代、ロシアに属していた時代など長い歴史の中で様々な状態を経験してきた国々です。ガイドさんなど現地の人と話して感じたことは、今でもロシアは脅威ということ。時間がゆったりと流れ、オゾンをつぶり含んだフレッシュな空気からはわからない、現地の人と話してやっとわかることも感じてきました。

1990年代に独立したことで近代化が進み、道路工事や、ビルの建築も行われていましたが、それぞれの

首都は昔の美しい教会や公園、石造りの建物が大事に保存され、しかも保存されているだけでなく、大事に住居や店舗として使われているのも、心に深く歴史を感じさせてくれるとともに、むかしからの自分たちの国や町を大切にしているのだと感じました。町はどこも東京のような巨大都市ではなく、バスで10分も走らないうちに田園風景に変わります。広々した牧場や時期的にどこに行っても黄色の菜の花畑が続き、緑と黄色、青い空とのコントラストに、旅行中10日間ずっと目を奪われていました。

今回のバルト三国訪問の目的は、美しい春の新緑の中でトレッキングを楽しむこと、そしてそれぞれ三国の最高峰(最高点)を制覇することでした。

一口にトレッキングといっても、コースは様々で、またトレッキングコースを囲む環境もバラエティーに富んでいました。湿地帯の中のコースで、沼や湖が点在し、その場所場所で植生が異なるコース。尾瀬のように板の道ばかり歩くコース。田舎の人家の中を鶏や犬の声を聞きながら歩いているうちに森の中に入り、丸太を倒しただけの橋を渡り川の向こうに行かなければならない、ちょっとエキサイティングなコース。靴を脱いで裸足で歩かなければならないコースに松ぼっくりやガラス、ビー玉などが仕掛けてあったり、木の根でこぼこした道やどろどろの水の中を歩かなければならなかったり他では体験できない、足裏マッサージコース。

最後の国エストニアではバルト海の海水に触れながら、波の音や鳥の鳴き声を聞きながら森の中を歩いたり、現地のガイドさんの説明を聞きながら、日本の風景とは異なる環境の中で歩くことを楽しんできました。

日本山岳会のメンバーとしては、やはりそれぞれの国の最高峰は訪れたい場所でした。リトアニアのオークトヤス(292m)、ラトビアのガイジンカルンス(312m)、エストニアのmanaギ(318m)を制覇し、証拠写真も撮ってきました。登山家で有名な田部井淳子さんも制覇されたとのこと、標高はかわいい数字でしたが、大変満足してきました。

また、最初に訪れたリトアニアのかつての日本領事館では、杉原千畝の足跡を垣間見してきました。現在はグローバルな規模で物事が進む世の中ですが、当時の厳しい情勢の中では杉原千畝の行為は想像以上の素晴らしいものだったかと思います。ユダヤ人のため、リトアニアを離れる汽車の中からも、最後の最後まで2000枚あまりのビザを書き続け、6000人も命を救った日本人がいたことは、現場に赴いて心に強く感じるものがありました。

この旅行を通して、地球がいつまでも美しく、人々が理解しあい、仲良く、平和で住める世界であるようにと願いました。



リトアニアの湖で



ラトビアのトチノキの並木道



エストニアの首都タリンの旧市街

\*当日は、「バルト三国トレッキング」に参加された横関邦子さんに、写真を投影しながら旅の思い出などをお話いただいた。続いて行事予定の紹介あり:緑爽会=七福神巡り(後述)、自然保護全国集会=高知・7月16~17日、全国支部懇談会=越後支部・4月9日~10日。忘年会は川嶋新太郎さんのカンパ〜イ!でスタート。「バルト三国」のことなど、飛び交う様々な話題を肴に大いに盛り上がった。(夏原記)

## 外国にも名山はありうるか

『日本百名山』の英訳者フッド氏講演

石塚 嘉一

昨年末ハワイ大学出版局から出版された深田久弥の『日本百名山』の英訳版の訳者マーティン・フッド (Martin Hood) 氏が来日。夫人の山田晴美さん(福井県・仁愛大学准教授)と共に日本山岳会(図書委員会)に招かれて、10月16日集会室いっぱい(の)の会員、非会員を前に、流暢な日本語で講演を行った。

現在スイス・バーゼルの国際決済銀行で働くフッド氏は、「マッターホルン vs 富士山——外国にも名山はありうるか」の講演テーマで、日本の山の文化や歴史を欧州と比較しながら、名山の概念を考察、日本の山岳文化に関する同氏の造詣の深さが窺えるものとなった。

1980年代に日本に留学、95年までの6年間東京にある外国の銀行に勤務していた間に本格的に登山を始め、日本勤労者山岳連盟(労山)に所属、週末には愛車スバルで毎週のように山にでかけていたフッド氏。「スイスに移ってからは日本アルプスがときどき懐かしくなる」と語った。

英訳でまず問題になったのが、本のタイトル「日本百名山」をどう訳すか、だった。深田久弥の長男・森太郎氏(緑爽会会員)と東京の喫茶室ルノアールで英訳出版の話をした時、森太郎氏に「名山」は”famous mountains”とはちよつとちがう、と言われたのでタイトルは”One Hundred Mountains of Japan”として、「名山」をあえて訳さないことにした。「名山」という概念は英語にもドイツ語にもフランス語やイタリア語にも、どこにもないのだからそれにあたる言葉もないということだ、とフッド氏は言う。

フッド氏は、18世紀末期の橋南谿の『東遊記』(彼の選んだ25の山はすべて宗教に関係した「霊山」)や(名山たるには火山でなければならないとする)19世紀末の志賀重昂の『日本風景論』にある名山論などをたどりながら、深田久弥の「名山」の概念は、もっとバランスのとれた、日本山岳会を設立した小島烏水の概念を受け継いでいるとして、『日本百名山』には45の火山とそうでない山55が入っていると指摘。

深田久弥が『日本百名山』のあとがきに示した百名山選定の3つの基準—山の品格、歴史、個性—について敷衍しその上で、そのような基準を満たす「名山」は日本にしかないのだろうかと問いかけた。

フッド氏は、今年初登頂から150周年を迎えるマッターホルンは、「名山中の名山」富士山と同じようだと言及。日本各地に「～富士」があるように、世界中にマッターホルンがある—アマ・ダブラムはヒマラヤのマッターホルン、アシニボイン山はカナディアン・ロッキーのマッターホルン、槍ヶ岳は日本のマッターホルンと呼ばれているように。

だから山の品格や特徴においては問題なく基準を満たしているが、歴史的には、マッターホルンは、エドワード・ウィンパーが1865年に初登頂に成功するまでは、地元ではただの「ホーン」や「ロック」と呼ばれ、地図にもろくに載っていなかった。日本では、その1000年前にすでに、白山が養老元年(717年)に僧泰澄によって開山されているが、ヨーロッパでは山は日本のような宗教的な意味はほとんど持たなかったからだ、とフッド氏は解説。しかし、マッターホルンの頂上には山の麓の村人たちが1900年頃に運び上げた十字架が立っている。白山や富士山、立山のような歴史を持たない(それでも『日本百名山』に入っている利尻岳のような)山々でも、人々は、日本でも、スイスでも、イタリアでも、どこでも、自分たちの山について、同じような感情を持つのではないかとフッド氏は考える。

初登頂に成功する3年前、ウィンパーの遠征隊のテントをかついでマッターホルンを上った麓の村のポーター、ルク・メイネは、10年後別の登山隊の荷物を担いで頂上に達した時、「天使の歌声が聞こえたから、もうこれで幸せに死ねる」と言ったと伝えられているのを紹介して興味深い講演を結んだ。名山はどこにもあるのだ。



## 追記

先のトレッキングでは、カトマンズのホテル・オーロラというプチ・ホテルを基地としたが、そのマダムは藤原さんという日本女性だった。モスクワ大学に留学中に知り合ったネパールの青年と結婚して、日本人トレッカーに向けたホテルを運営していた。ミッチーという可愛い女の子がいて、皆の人気者だった。しかし、カーストと男尊女卑のネパールに耐えられなかったのだろう。風の便りに離婚して日本に帰ったと聞いていた。なんとその藤原さんが、松本恒広さんの親戚（弟さんの奥さんのお姉さん）と知って驚いた。さらに言うなら尺八の名手・藤原道山さんのお姉さんでもあった。マダムは日本に帰ってから不慮の事故で亡くなったが、手元に引き取って育てたミッチーは、結婚したネパール男性と一緒に西武沿線でネパール料理店を運営している。家には大きすぎて飾れない大山恭司さんのヒマラヤの写真も、そこに収まっている筈である。

## ナーゲル

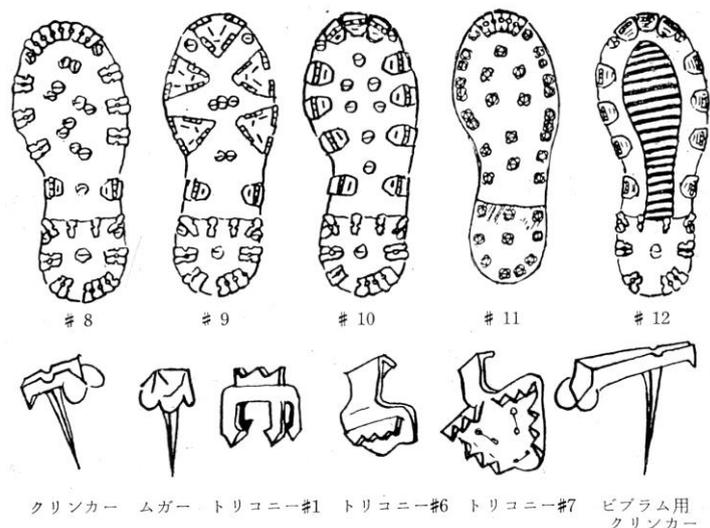
夏原 寿一

### ・私のナーゲル

「ナーゲル」と聞いて、懐かしいと思う方は多いと思うが、聞いたことはあるけど見たことはないとか、中には「ナーゲルって何？」という方がいるかも知れない。下の写真は私のナーゲルだ。ナーゲルについて、手元にある1958年版の山日記に『もともと登山靴に打つ鋲の意味であるが、鋲靴の略称としても使われる。鋲の種類としては一般的にクリンカー、ムガー、トリコニーなどが使われている。』とある。また、別項には鋲についても、その特性などが記されている。

次ページの図は、そのころ貰ってきた「山友社・たかはし」のカタログに載っている鋲打ちの例と鋲の種類で、私のナーゲルの鋲打ちは、岩にも縦走にも向いているという左端のタイプ、使われている鋲は図の下段の左から1, 2, 4番目のクリンカー、ムガー、トリコニー#6の3種類だ。1958年、知人の馴染みの佐藤という浅草の靴屋さんに作ってもらったもので、鋲の数は両足で計106本、重さ2.5kgの代物だ。値段は6,000円ぐらいだったように記憶している。

この靴で登った最初の山は戸隠山。岩を歩くときの「ガリッ、ガリッ」という感触や、駅のホームを歩くときの「ゴツッ、ゴツッ」という響きは懐かしい思い出だ。



## ・加賀正太郎とナーゲル

日本人で最初にユングフラウに登っている加賀正太郎は、その旅の途上で初めてナーゲルを履いたときの印象を『歐州アルプス越へ』（「山岳」第6年第1号）に書いている。それを紹介しよう。（『 』内は原文通り）

先ず、見た目を『釘だらけの靴』と書いている。“釘”の形は不明だが、ウエストンの靴の写真を見ると鋸の頭が三角形に尖っているので、多分、同様の形だろうと想像している。次に、履いた感想を『さながら甲鐵艦をつゝかけて歩く思ひの靴をひきづつて』と、重くて頑丈な靴を履いて歩くさまを表現している。そして、『至る處ホテルの廊下といはず室といはず美しくはりつめたモザイクの床板絨を靴の釘に掛て縦横にひっかきちらしてウエエタアの眼を敬(そばだ)てさしてやったのは聊か痛快でないでもなかつたが磨き上げた大理石の廣場には毎度足をとられて殆ど閉口した』と、歩きにくさに閉口しながらも茶目つ気を覗かせているところが面白い。

加賀はナーゲルを『フランクフォルト、アム、マインツ』で買っているが、ユングフラウに登ることが目的の旅なのだから『多少の足ならしも必要には相違ないがさりとてあまりに早過ぎた』、『ツウリッヒ邊で整へる事が最便利であらう』と、遠いところで買ってしまったことを後悔しながらナーゲルでの長旅を振り返っている。こうして旅行記を読んでいると、あの大変な人物である加賀正太郎が身近に感じられてくるところに何とも言えない味わいがある。（ルビは夏原）

\* 加賀正太郎については、緑爽会会報 No. 137 と No. 138 に「お茶の水時代の人 加賀正太郎のこと」と題した南川金一さんの記事が掲載されている。

\* この小文の前半、「私のナーゲル」は数年前に山仲間の会報に投稿したものである。当時、そのコピーを静岡支部の長田義則さんにお送りしたところ、「加賀がナーゲルを履いて閉口した話が『山岳』6-1に掲載されているのを思い出した」とのお手紙を頂いた。その「山岳」の内容を「加賀正太郎とナーゲル」と題して、ここに紹介した次第である。

尚、No.138 の5頁の写真は、『歐州アルプス越へ』の掲載されている前掲の「山岳」である。

～～《予告など》～～

1月山行 青梅七福神巡り 担当:荒井正人

1月16日(土) (\*前号では「17日」になっています。訂正します。)

集合: 青梅線「東青梅駅」改札に 午前10時

行程: 約5時間 ●聞修院(寿老人)→明白院(福祿寿)→地藏院(布袋尊)→清宝院(恵比寿)  
→玉泉寺(弁財天)→宗建寺(羅紗門天)→延命寺(大黒天) ・バスを利用することもあります。

昼食持参

雨天中止

最終地点青梅駅近くで軽い打ち上げを予定(参加任意)

参加申込みは担当荒井まで:



カット:中村好至恵

2月例会 「JACとJYH（日本ユースホステル協会）の今・・・」 お話し：山本良子

2月4日（木） 1時30分から集会室で

ユースホステルはドイツ発祥の世界的運動で、日本のワンダーフォーゲルのキッカケになったとも言われている青少年運動です。その歴史を知り、また利用することは、私たち岳人にとってもメリットのあることではないでしょうか。

3月山行 3月17日（木） 丹沢方面を予定しています。担当：島田稔

4月総会 日程未定 2016年度から、総会は4月に開催します。

5月山行 日程未定 行先未定 担当：近藤雅幸

おめでとうございます♪

梨羽時春さん（No. 6025）が永年会員顕彰を受けられました。

\* 梨羽さんの紹介者は深田久弥さんです。

#### ---事務局のつぶやき---

◆久しぶりの長澤さん経営の「ロッジ山旅」。信濃支部の田村さん、秋田支部の福田さん、越後支部の高辻さん、地元山梨支部の長澤さん。そして東京から渡部さんと私。多彩な顔触れとなった。他に同宿は若き女性二人組。皆で寄ってたかってJACへ、緑爽会への入会を勧誘する。果たしてその成果如何。（松本恒廣）

◆忘年会---川口さん、鳥橋さん、田井さんの3人は瞬く間に手の込んだ肴を仕上げていく。差し入れで卓上は酒瓶が林立、メインは吉田さんの一升瓶・越乃寒梅。樋口さん、山川さん、藤下さんなど久しぶりの顔触れも揃って、賑やかな宴になった。（渡部温子）

◆前期高齢者となった今年も残り僅か。例年この時期は一年を振り返り、来年の目標を考えます。何はともあれ「賭けるものがある限り青春」の気持ちで新年を迎えたい思いです。もちろん健康が前提ですが。（荒井正人）

◆高辻さんから11月山行の報告をいただいた。雨の初日は気の置けない宿でのんびり過ごし、翌日は展望には恵まれなかったものの、歴史の香り漂う中山を歩く。晩秋の2日間を彷彿とさせてくれる。

近藤緑さんがエッセイをお寄せ下さった。この夏永遠の眠りにつかれたお友達との、40年にわたる家族ぐるみのお付き合いの思い出を述べておられる。「懐かしい人が、また一人いなくなった」の文字に、別れの悲しみを思う。

今年もめぐって、来週は新年になる。「齢を重ねるほどに月日の経つのが早く感じられる」と言う。全くその通りと頷くばかりである。（夏原寿一・編集）

良いお年をお迎えください 事務局一同